類については充分に検討されていないものが多い。本報ではそれらのうち4種について検討し，以下のような結論を得た。

1. 本州（伊豆半島）及び九州のオドリコカグマは，中国大陸の *M. sino-strigosa* と同じである。

2. 台湾のタカサゴイシカグマは *M. trapeziformis* ではなく，雲南から記載された *M. trichosora* にあたる。この種類はインドシナやタイの *M. herbacea* の変種として扱うのがよい。

3. 台湾のニセイシカグマは独立種とする方がよい。

4. 屋久島のヤクシマカグマは，琉球や台湾のコウシュンシダと同じものである。屋久島で最近コウシュンシダと呼ばれていたものは，変種のホソバコウシュンシダ（新称）として区別される。

○ニセツキヌキサイコ（新称）について（水島正美）　Masami MIZUSHIMA: *Bupleurum lancifolium*, a new casual

市販の小鳥の餌料がこぼれ，庭先に妙なセリ科植物が生えた。全体に灰白味があり，茎下部の葉から上部のものに至るまで貫生し，単葉である。よく分枝して丸い草姿になり，5月から6月にわたって細黄花を開く。これは一見ツキヌキサイコ（奥山氏が本誌 **26**: 349, 1951 に発表）を想起させるが，果実に明確な差異がある。和名ツキヌキサイコの基準となる標本は東京品川区五反田駅附近で1951年5月に採られた花期のもので，果実の形質は分らない。特異な葉状に基いて *Bupleurum rotundifolium* L. と同定され，以後今日に至るまで，各地に見つかった同様な植物には上記の学名，和名を当てゝ済ませて来たようである。つまり花期に見得る形質が調べられただけであった。若しこれらが真の *B. rotundifolium* ならば，果実は長さ 2–3 mm で表面に粒状突起がないものである。だが拙宅に生えたものは果実が約2倍大で，表面に粒状突起を満布する。これは ***B. lancifolium*** Hornemann という地中海地方産の一種で，*B. rotundifolium* のように世界各地に帰化してはいない。ツキヌキサイコが正しく後者に与えられた和名とせざるを得ない今日，前者には**ニセツキヌキサイコ**と新称しておく。両種共に1年草と諸書にあるが，拙宅のニセツキヌキサイコは昨年も今年も開花結実し，今年の方が大きく育った（主茎は単立）。6月中旬に1枝を残して標本に作ってしまったが，来年も萠芽してくれるかどうか。標本の一部を MAK 100800 として牧野標本館に納めてある。小文を草するに当り助言して下さった館岡亜緒，浅井康宏の両氏に深謝を捧げる。

（東京都立大学牧野標本館）